
封じられた殺意

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封じられた殺意

【Nコード】

N5703T

【作者名】

takosashi

【あらすじ】

ある障がい者施設での殺人事件。容疑者が特定されるも、そこには隠された真実が：玉木と井岡のいつものコンビが、謎に挑みます。（今回はちょっと簡単すぎた：かな？）

K市の障がい者施設「ぬくもり」にて…

某日、午前2時ごろ、介護士、近藤均さん（37）が、頭から血を流して倒れているのが発見された。

周囲には争った跡があり、K市警察は殺人事件と断定。

現場に向かう車の中で、玉木と井岡の2人は、コンビニのサンドイッチをぱくついていた。

「あまり、いい噂は聞かない施設ですね。小耳に挟んだんですが、収容者への虐待があったとか…確証があるわけではないんですが」井岡が言った。

「おもに身体的な障がい者がいる所だそうだな。手が無かったり、足が無かったり…でも、そういうところでは、虐待はよく聞く話だ。嘆かわしいことにな。虐待される方は、対抗することも、逃げることもできん、というのにな」

やがて、2人は現場に到着した。

「はいはい、みなさん！ いま、お巡りさんが調べてくださっています！ じぶんのお部屋へ戻って、静かにしてくださいくださいね」介護士のひとりが、現場を遠巻きに囲んでざわついている、障がい者たちに呼びかけていた。

「院長さん」

玉木の声には、明らかに怒気がこめられていた。

「凶器はこれです。ゴルフのアイアン…なんで、こんな物がここにあるんです？」

「そ、それは…」

「知らなかった、で済むとでも？」

「私の責任です、申し訳ありません…」

初老の院長は、頭を深く下げた。玉木はさらに、

「これは、はじめは被害者である近藤さんが持っていたものですね？」

「そ、それは私には…」

「まだ、責任を逃れられるとでも…？ この施設では、入所している障がい者に対して、日常的に虐待が行われていた。このアイアの他にも、何かあるんでしょうがね。夜中に、これで布団の上からメッタ打ちにする…被害者は『お楽しみ』の途中だった。そこを、何者かがこれを奪い取り、殴り殺したんだ」

「まことに…まことに、申し訳ありません」

玉木はやや興奮ぎみだったので、

「いまは容疑者の特定を優先しましょう」

井岡が言った。

「それはそうだ。鑑識の方はどうだ、井岡」

「それが…凶器のアイアンですが、当然、ガイシャの指紋と、容疑者の指紋がついているはずですが…」

「ですが…何だ？」

「結論から言います。容疑者は佐々木俊夫。21歳。ここの入所者のひとりです。ガイシャを殴り殺したのは、彼に間違いありません」

「そうだ。オレがやった」

佐々木はそう言ったきり、口をつぐんでしまった。

「きみは、下半身麻痺の障がいがある。車椅子の上から、1メートル80センチある近藤さんの頭をどうやって殴ったんだ？」

「…」

（なにか、変だな…）

急遽、施設内の一角を借りての、事情聴取となった。

またしても、イヤな言葉が2人の頭をよぎる。

不可能犯罪…

するとそこへ、一人の男が近づいてきた。

「ダメだよ！ 木村さん！」

木村と呼ばれた男には、両腕が無かった。

「違うんです、刑事さん！ やったのは私です！」

玉木と井岡は顔を見合わせた。

佐々木と木村は、とりあえず待機させておき、

「どっちが、本当のことを言ってる？ 2人とも、犯行に及ぶには不可能な体だ。両腕がなくて、どうやってアイアンで人を殴り殺せる？」

「…2人とも、動機は一緒ですね」

「ああ。日常的な暴行への復讐だ」

「これは…驚くべき事件ですね、玉木さん」

「は…なんだって？ まさか…」

「そのまさかです。容疑者がわかりました。しかも、どちらも本当のことを言っています」

両腕のない木村が、下半身の不自由な佐々木を肩車したのだった。そうすれば、高さは2メートルを超える。その状態で自由に動けるようになるには、かなりの練習が必要だったと思われるが、両足のきかない佐々木の腕力は並大抵のものではなかった。近藤からアイアンを奪い取り、頭蓋を砕くことなど、たやすいことだった。

「やつは、オレたちはなにも出来ないと思っていやがった。だが、オレたちだって、力を合わせれば、何だってできるんだ」

佐々木は若い怒りを露わにした。それに対し、もう50は過ぎて

いると思われる木村は、

「私が言い出したことです。佐々木くんには罪はありません…」

2人は殺人容疑で緊急逮捕された。

「ちょっと後味の悪いヤマだが…認識を新たにしたな、井岡よ」

「ええ…力を合わせれば何だってできる、ですか…」

「まあ多分、情状酌量の余地は、あるだろうさ…」

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703t/>

封じられた殺意

2011年10月9日01時49分発行